「対人的定量感」と競争的達成動機の関連性

村上幸史

(神戸山手大学 現代社会学部)

key words : 競争的達成動機・資源・しろうと信念

The relationship "interpersonal fixed quantity feeling" and competitive achievement motivation

Koshi Murakami

(Kobe Yamate University Faculty of Contemporary Society)

key words : competitive achievement motivation・resource・lay theory

(問題)

日常生活の中では、非実在的なものに対して「減る」や「奪う」、「定量である」などの形で表現され、あたかも量に限界がある資源のように取り扱われている事柄がある。このような考え方を資源の限定観と呼ぶ。対人間を含めた特定の社会での限定性を唱えるものと、個人単位で限りがあると考える説に分けることができる。村上(2012a; 2012b)は、この両者を区別して、資源の限定観に関する調査を行っている。

資源の限定観の特徴は、個人が成功や幸福を得るために必要な資源に対して、何らかの形で限定性を見出している点である。そのため、後者の「世界や自分の周りでその量が決まっている」という特定の社会内での限定性(以下「対人的定量感」と呼ぶ)意識は、競争意識に結び付き、他者と相対的な比較を行う傾向を促進すると考えられる。村上(2012b)は、この「対人的定量感」が主観的幸福感を低下させることを示している。

本研究では「対人的定量感」の背景にあると考えられる、この達成動機の競争的側面に加えて、公平世界観(Just World Belief)にも着目した。公平世界観は因果応報に関する信念である。白井(2011)は因果の公平性と現状の不正性を測定する2次元の尺度を作成し、その妥当性を確かめている。

「対人的定量感」の考え方を持つ者は競争的達成動機が高いため、他者の出来事の成否に対しても意識が高まり、結果的に因果応報的な判断がなされやすくなるのではないかと考えられる。また競争意識が現状での満足感を抑制することから、現状の不正性を高く判断すると推測される。以上の点に関して、調査を通して検討した。

(方法)

質問紙調査の内容は、村上(2012b)に基づいている。回答者は20代から60代までの500名(男女各250名)であり、インターネット上で行い、調査会社に委託した。回答者は、男女世代別の収入を元に、それぞれ高中低の3群に割り当てている。

資源の限定観を測定する項目として用いたのは、村上(2012a)を元に21項目(幸福、活動のエネルギー、チャンス、勢力、異性にもてること、やる気、生気・気、人脈、魔力、流れ・勢い、生命力、善意や優しさ、人脈、熱くなる・夢中になれること、得意な分野(領域)、喜びや快感、愛情、センス・才能、縁・出会い、アイデア、運)である。これらについて「対人的定量感(世界、自分の周り)」「対人的剥奪感」「個人内減少感」「個人内定量感」の5分野それぞれに該当するものを全て選択してもらった。

加えて、公平世界観を測定するJWB完成版尺度(白井, 2011)や達成動機尺度(堀野, 1987)の下位尺度である、競争的達成動機に関しても測定を行った。

幸福感については主観的幸福感尺度(Subjective Happiness Scale, SHS)と全般的な生活満足度尺度(Satisfaction with Life Scale, SWLS)の2つの尺度を用いた。SHSはLyubomirsky & Lepper(1999)の作成した項目を翻訳した、島井ら(2004)の項目(4項目)を、SWLSはDienerら(1998)の項目を、大石(2010)が翻訳したものを用いた。

(結果)

村上(2012b)では「対人的定量感(世界、自分の周り)」の項目については、カテゴリ主成分分析を行い、幸福や愛情のポジティブ感情と生命力やエネルギーなどの6項目で構成される「感情」カテゴリ、運、流れ・勢いや人脈、勢力の影響など5項目で構成される「勢い」カテゴリ、縁・出会いや人脈の対人関係や、アイデアや領域の知能資源など6項目で構成される「成功資源」カテゴリという、3カテゴリが得られている。ただし、いずれの得点も半数以上が0点(全て非該当)であるため、本研究では0点

か、それ以外の有無による2群に区分して分析を行った。

JWB完成版尺度では、下位尺度間(因果の公平性・現状の不正感)の相関は小さかった($r=-.16$)。競争的達成動機得点と現状の不正感得点の間には、競争的達成動機が高い者ほど現状の不正感も高いというやや弱い相関が見られた($r=.24$)。

「対人的定量感」の3カテゴリ得点をそれぞれ独立変数、JWB完成版尺度得点と競争的達成動機得点を従属変数とした分散分析を行ったところ、3カテゴリ全てでカテゴリ有群の方が無群よりも、現状の不正感得点と競争的達成動機得点が高いという有意な差が見られた。因果の公平性得点については、「成功資源」カテゴリで有群の方が低いという有意差が見られたが、「感情」カテゴリでは差がなく、「勢い」カテゴリでは有意な傾向にとどまった。

回答者は収入を元に、それぞれ高中低3群に割り当てられている。そこで収入と競争的達成動機得点を独立変数として、幸福感の二つの測定(SHSとSWLS)を従属変数とした分散分析を行ったところ、SWLSについては交互作用が見られ、競争的達成動機が低い群は収入と関係なく、SWLSがほぼ同じであるのに対して、高い群では収入に応じてSWLSが変化する傾向が見られた。

(考察)

予測通り、「対人的定量感」を持つ者は競争的達成動機も高かった。競争的達成動機は単独で幸福感と関連している訳ではなく、収入という要因を加味した場合に関連が見られた。

このことから、現実の成功要因の有無だけが幸福感に影響するのではなく、「対人的定量感」が競争的達成動機を高めた結果として、幸福感の変動に結び付いていると考えられる。

因果の公平性については、「正しい」使い方など、個人内の定量感とも関連している可能性がある。この点は検討の余地が残されていると考えられる。

(引用文献)

- 堀野 緑(1987). 達成動機の構成因子の分析—達成動機概念の再検討— 教育心理学研究, 39, 148-154.
村上幸史(2012a). 資源の限定観に関する調査の試み 日本心理学会第76回大会論文集, 267.
村上幸史(2012b). 奪い合いの意識は不幸を招くか?—資源の限定観からの検討— 日本社会心理学学会第53回大会論文集, 235.
白井美穂(2011). 多次元的な公正世界観(Just World Beliefs)とその測定—尺度の妥当性と信頼性についての検討— 日本社会心理学学会第52回大会論文集, 222.

(MURAKAMI Koshi)

Table1 「対人的定量感」と測定変数の平均値

	「感情」カテゴリ		「勢い」カテゴリ		「成功資源」カテゴリ	
	無群	有群	無群	有群	無群	有群
競争的達成動機	46.77	49.27	45.25	50.16	46.35	49.22
因果の公平性	14.83	14.57	14.93	14.53	15.09	14.32
現状の不正	15.67	16.34	15.52	16.32	15.56	16.32

Figure1 収入と競争的達成動機がSWLSに与える影響

※この研究は日本学術振興会科学研究費補助金(若手研究(B)23730596)の助成を受けた